令和６年１２月定例会で一般質問を行いました！

リニアを活かしたまちづくりについて

現在、中津川市を取り巻く社会環境は、急速な少子高齢化、人口減少などと大きく変化をしています。一方、当市には２０３４年以降の見通しでリニア中央新幹線が開業し、岐阜県駅や中部車両基地が設置される予定で、開業すれば、超巨大な経済圏が形成され、大きな経済効果を生み、まちの発展も期待されます。当市の他に、品川・名古屋間でこのチャンスを得た市は、相模原市、甲府市、飯田市があり、どの市も特色を活かして活性化に繋げていくと思われます。当初の予定より７年以上遅れることは残念ではありますが、準備期間が延長され、万全な体制でリニア開業を迎えることができるようになったと考えます。さて、リニアを活かしたまちづくりは、リニアのもたらす効果を最大限に発揮し、産業や観光の振興はもちろんのこと教育・医療・福祉の充実など、市民の皆様の生活向上に、またリニアの交通の利便性が定住や移住の促進に繋がるものと考えます。当市が持つ豊かな自然、独自な歴史・文化などの潜在的な力を高めることが、リニアを活かしたまちづくりに繋がると考え、現在の状況と今後について問いました。

そして、付知川の鮎は、令和６年９月２０日に高知市で開催された全国大会「第２５回清流めぐり利き鮎会」で準グランプリを受賞しました。この大会は、鮎の味はもちろんのこと、姿・香り・わた・身の５項目を審査対象として、河川名を隠し厳正に審査したものです。昔から付知川は青川と呼ばれ、水の青さと清らかさからその名前が付いたと言われております。正に、これが「地域資源」だと考えます。地域資源である清流付知川を磨き上げるために付知川の鮎をまちづくりに活かしていけないか問いました。最後の質問のみ掲載します。一般質問の詳細は中津川市議会インターネット映像配信で見ることが出来ます。是非、ご覧下さい。

質問　今回の受賞は、付知川の鮎の「食」を使った観光誘客、指定管理施設（温泉やキャンプ場）などの誘客に繋げる戦略をつくるきっかけになったと考えます。実現するためには、付知川の管理者である恵那漁業協同組合との協力体制が必要だと思いますが如何お考えか伺います。

答弁　付知川の鮎を活用した観光誘客促進には、恵那漁業協同組合との連携は有効であると考えます。恵那漁業協同組合は、鮎の友釣り体験会を開催するなど独自の取り組みを展開しており、観光誘客のための新たな体験コンテンツの造成などに繋げられる可能性もあるため、先ずは情報交換などを行い、どのような取り組みができるか検討してまいります。

まちづくりの主体はその地域に住む人であり、地元住民などの協働なしにまちづくりの成功は難しいと思います。その地域の人々が自分たちで維持できる仕組みをつくり、地域の経済が豊かになるシステムを構築することが必要であり、それをサポートする市の取り組みも重要であると考えます。地域の魅力を最大限に引き出し、より地域への愛着が湧く仕組みをつくることで定住や移住にも繋がる魅力あるまちになると考えます。人口減少、少子高齢化という厳しい時代を迎えるなか、千載一遇のチャンスであるリニア開業をまちづくりに活かし持続的に発展する中津川市をつくっていくためには、地域資源の発掘や磨き上げを行い、リニア開業に備えることが重要であると考えます。